

2020年度業務実績報告書

提出日 2020年12月28日

1. 職名・氏名 教授・木村小夜
2. 学位：博士（文学）奈良女子大学、1994年
3. 教育活動

(1)講義・演習・実験・実習	
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等	国文学（2単位）1、2、3年生
② 内容・ねらい	小説とは、一人の作家が自分の頭の中だけでオリジナルに創り出すものでなく、様々な先行テキストの影響や同時代状況との関係を前提としてはじめて成立する。このことを端的に示すのが、翻案やパロディというジャンルであると言えよう。ここで取り上げる太宰治『お伽草紙』は、時代を越えて読み継がれてきたお伽噺を素材としている。これらの読み替えを詳細に追うことで、人間関係における性格や罪悪のとらえかたの変転とその必然性を考察する。詳細は、シラバスの「授業概要・目標」参照。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫	講義が一方通行にならぬよう、数回に一度の割合で二百字程度の小課題を提出させ、次回の冒頭でそれを詳細に紹介しつつ講義内容に組み込んだ。課題内容は、その時間の授業全体を踏まえた上で自由な思考力を問うものを設定している。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等	国文学特殊講義（2単位）2、3、4年生
② 内容・ねらい	上回生向けに、作品のより高度で詳細な解説に踏み込んでもらうことがねらい。具体的には、日本近代文学研究上、代表的な作品解釈論争（芥川龍之介「地獄変」、谷崎潤一郎「春琴抄」）を紹介し、自身の解釈と照らし合わせ、レポート執筆で総括とした。詳細は、シラバスの「授業概要・目標」参照。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫	受講者は少数であったため、一方的な講義にとどめず、指名発問を頻繁に行い、意見交換を行った。熟読を必要とする箇所は、朗読により、内容への集中を促した。さらに、作者への理解を深めるため、視聴覚教材を利用。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等	文学概論（2単位）1、2、3年生
② 内容・ねらい	いくつもの文学作品に共通して表れる様々な対比や世界間の越境など、作品に組み込まれている装置や普遍的な主題について講述する。具体的には、小説が書かれていく過程と密接に関わる「自分について書くこと」、即ち日記や手紙などのジャンルから、様々な作家や文章を引き合いに出して考察を深めることを目的とする。詳細は、シラバスの「授業概要・目標」参照。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫 a. 音声と資料によるオンデマンド授業なので、講義が一方通行にならぬよう、毎回二百字程度の小課題を提出させ、次の冒頭で紹介しつつ講義内容に組み込んだ。また課題内容は、その時間の授業全体を踏まえた上で自由な思考力を問うものを設定している。 b. 資料については、理解に集中して欲しいと考え、講義内容を後で再現出来るようなものを作成。試験対策ともなるよう、各項目での要点を冒頭に示す。 c. 授業中盤での息抜きとして、昔のヒットソングを聴かせる。歌詞を配布し、解釈や時代背景説明を行い、関連する小説などを紹介。課題にも組み込んだ。
① 担当科目名（単位数）主たる配当年次等 現代人権論（2単位）1年生 教養特講（研究の世界）（2単位）1年生 ② 内容・ねらい 以上二科目はオムニバス形式。各教員が専門領域を生かして、一つのテーマについて一回ずつ講述。前者は北條民雄の作品を題材としてハンセン病患者隔離政策をめぐる歴史を扱い、後者は自分の研究に関して、選択の動機や面白いと感じていることを、具体的な作品読解を通して講述。 ③ 講義上の工夫 いずれも受講者は大人数で一回限りの授業であるため、詳細なプリントを用意。共に、書画カメラ（視覚教材）を援用。最後に全体のまとめとなる具体的な課題を出し、二百字で解答させた。
① 担当科目名（単位数）主たる配当年次等 導入ゼミ「文芸作品との対話」（1単位）1年生
② 内容・ねらい 読む・書く・話す・聞くことに重点を置き、短篇小説の読解を深める。選んだ作品についてレジメを作って発表し、意見を述べる。小説を素材として大学での勉強の基本的姿勢を身につけることが主目的。テキストは、自由に選択させた。詳細は、シラバスの「授業概要・目標」参照。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫 a. 学生のモチベーションを優先すべく、発表の題材となる作品、レポート課題は自発的に選ばせた。 b. レジメ作成・これに基づく口頭発表・質疑という演習の基本を習得させるため、作品への着眼点などを最初の授業で講述した上で、教員がまず発表のデモンストレーションを行った。 c. 自分で問題点を見つけるという大学での勉強の姿勢と高校までの（とりわけ受験国語的で）受動的な勉強との違いを示し、後者からの脱却を図っている。レジメ作成と発表については、GC上での個別指導を行い、ゼミの時間が有意義に使えるように努めた。 d. 最初の段階は特に場が硬直しがちなので、発言しやすい雰囲気をつくるため、折に触れてゲーム的要素を取り入れる、ブレイクアウトセッションの時間を合間に挟む、など種々の改善に努めた。 e. 後半では、レポートの書き方（構想・推敲の具体的スケジュール・提出方法も含む）を指導し、提出物にはコメントして返却。合評により、書かれたものを通して受講生相互のコミュニケーションを図っている。
① 担当科目名（単位数）主たる配当年次等 教養ゼミ「短篇小説を読む」（1単位）1年生
② 内容・ねらい 森見登美彦『新釈 走れメロス 他四編』の各編について原典と比較しながら精読する。全体で議論の後、発表・質疑へと進める。導入ゼミに引き続き、自発的な問題点の発見と表現力を培うことがねらい。詳細は、シラバスの「授業概要・目標」参照
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫 a. 導入ゼミa.b.c.dに同じ。

b.説明的文章、いわゆるレポートを書く機会は他分野でも多いので、ここでは扱った作家と同じような流儀でパロディを書くことを課題として試みた。授業での作品理解の深まりが実作の内容にまで表れ、書いた本人が意識しなかったことを読み取る学生もいるなど、書かれたものと書き手の関係もかいま見える。学生相互の刺激にもなり、興味深い展開になることが多い。
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等 学術ゼミ（2単位）2、3、4年生
② 内容・ねらい 小説に関心を持つ学生を対象に、日本近代の代表的な短篇を精読し、発表と議論を行う。前期は太宰治の女性独白体作品、後期は昭和初期の代表的な作家の短篇を読む。所属学科で学ぶ内容とはまったく別の対象、ものの見方によって視野を広げ、小説解釈の深い世界に踏み込むことがねらい。詳細は、シラバスの「授業概要・目標」参照。
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫 導入ゼミa.bに同じ。モチベーションは高いが、同時に就職活動が忙しい受講生が多いので、ゼミ初回に関心のありかや希望を聞き、半年間の予定には変更も可能なよう、融通を持たせている。
(2)その他の教育活動
演劇サークル、文芸部、日本遊戯振興会、よっしゃこい、競技かるたサークル顧問。演劇サークルは教室で発声練習などの活動のため、コロナ対策を必要とした。

3. 研究業績

(1)研究業績の公表
① 著書
② 学術論文（査読あり）
③ その他論文（査読なし） 「読む」力と「国語」入試の明日—新学習指導要領と大学入学共通テスト」（単著、依頼） 2020年4月、『現代思想』48巻6号、青土社、51～62頁 「言葉の教育のための覚書—共通テスト・授業実践例・新学習指導要領—」（単著、依頼） 2021年3月、『社会文学』53号、日本社会文学会、（2020.11受理）
④ 学会発表等
⑤ その他の公表実績 「書評・内海紀子・小澤純・平浩一編『太宰治と戦争』」 2020年5月、『日本文学』69巻5号、日本文学協会、72～73頁
(2)科研費等の競争的資金獲得実績
(3)特許等取得
(4)学会活動等
日本近代文学会評議員（2016～継続）

5. 地域・社会貢献活動

① 国・地方公共団体等の委員会・審議会 福井県ふるさと文学館資料評価会議（2021. 2 開催予定）
② 国・地方公共団体等の調査受託等
③ （公益性の強い）NPO・NGO法人への参加
④ （兼業規程で業務と見なされる範囲内での）企業等での活動
⑤ 大学間あるいは大学と他の公共性の強い団体との共催事業等
⑥ 公開講座・オープンカレッジ等の開講
⑦ その他

6. 大学運営への参画

(1)補職（副学長、部局長、学科長）
(2)委員会・チーム活動
入試制度検討委員会委員 公開講座企画WGメンバー 学術教養センター研究委員会委員
(3)学内行事への参加
(4)その他、自発的活動など